漢詩神奈川

第　14　号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市栄区笠間
5-3-2-103

TEL−FAX
045-895-2662

発行人　岡崎 満義
編集人　桜庭 慎吾

新企画着々　成果著し！

―総会催さる―

壇上横断幕は上田尤子会員の書

岡崎満義 会長

風わたる季節、五月二十二日神奈川近代文学館において、県連総会が催された。

この日、晴天の港の見える丘公園には、多くの市民が散策し、バラ園には写生する画家たちがあちこちにスケッチをしていて賑やかな風景に満ちていた。

総会には七十名が参加し、岡崎会長(議長)・櫻庭事務局長の司会により議事が進められた。要旨は次の通りである。

○ 会長挨拶

一、昨年四月に立ち上げたホームページは県連最大の事業であり、会員の手作りによる点が特色である。

アクセスは二千二百人を超えて、HPからの会員入会の申し込みも出始めており、効果は著しいものがある。

今年は、動画・音声が加わってデータ更新も順調に管理され、常に新鮮な内容を維持・公開している。

全漢連に協力して、HPの再構築チームの活動が始動しており十月よりニュースバージョンによりスタートする予定である。

二、地元紙の神奈川新聞に漢詩欄が登場し、毎月第一日曜日に岡崎会長の執筆による、楽しい記事が掲載されている。

漢詩に縁の無い方々への誘いとなっている。

神奈川新聞社の文芸に対する理解の高さによるものである。

三、漢詩初心者講座は、毎年の行事として県連の活動の根幹になっている。これによって会員数が毎年増加している。そして新しい多彩な会員が加わっており、まさに人材の宝庫といえる。

四、詩吟サークルの岳精会が新しい漢詩勉強会を発足させ、県連の講師出前講座の成功例となっている。

五、「バトル漢詩甲子園」と名づけて七サークルの交流会を実施した。

七人の論者による討論と、窪寺先生の明快かつ作詩の要点に触れる判定によって八十名の参加者は大いに漢詩の理解が深まった。

今後もこれは継続してゆきたい。

六、全日本漢詩連盟十周年大会において、石川省吾さんが文科大臣賞、中島龍一さんが斯文会理事長賞を含め、県連から六名の入賞を果たし、県の作詩レベルは向上している。更なる皆さんの活躍を期待します。

○ 報告

今年の活動計画は、要約すると以下の通り。

・会員　二百十二名
・会員詩集「神奈川清韻第二集」の発行
・サークル交流会はバトル方式で予定
・吟行会　十一月二十六日　鎌倉
・研修会　六月四日、十二日、十八日に実施
・初心者講座　七期生二十三名で実施中
・ホームページ　さらに魅力のある画面を提供
・書道界へのアプローチを計る

○ 二十四年度決算・二十五年度予算

前年度会計報告・監査報告・今年度予算は承認された。（内容は下段左参照）

○ 人事体制

理事福原豊弘氏は退任され、新運営委員に飯島敏雄氏・柴田洋氏が承認された。

・顧　問　石川忠久　窪寺　啓　浅岡清明
・会　長　岡崎満義
・副会長　田原健一　水城まゆみ
・事務局長　桜庭慎吾
・理　事　石川省吾　礒野衛孝　玉井幸久
　岡田泰男　古田光子
　（退任）福原豊弘
・執行役理事　城田六郎　三上光敏
　（及び岡崎　田原　水城　桜庭）
・監　事　住田笛雄
・運営委員　川上修己　高津有二　中島龍一
　三村公二　室橋幸子　吉岡昭夫
　飯島敏雄（新）　柴田　洋（新）

○ 講演

総会に引き続き、講演は石川忠久先生の「漱石に見る漢字文化の受容」である。

江戸人の漱石が佐幕派として、薩長の明治政府に抱く気持ちを理解しながら、漱石に影響を与えた人々の話、漢詩の裏の意味などについて時間をオーバーしての熱のこもった講演であった。（内容は九頁）

○ 懇親会

総会の後、隣のポートヒルホテルに場所を移し懇親会を催した。

岡崎会長が人生百年、スーパー少子化の時代、漢詩連盟の集まりを通じて、老後の楽しみの会にしたいと挨拶。

酒井謙太郎さんの乾杯でスタート、室橋幸子さんの司会で様々な余興が繰り出され、五十余名が十分愉しみ、懇談も弾んだ。

締めの挨拶を圓谷照男さん、閉会宣言を水城副会長で終えた。

○ 賀詩

最後まで同席された石川岳堂先生、窪寺貫道先生から懇親会での即席の玉詠を戴きました。（読み下しは吟詠の住田氏による）

神奈川漢詩連盟總会偶成　　石川岳堂

盛發薔薇黄白紅　盛んに発く薔薇　黄白紅
花香誘引入詩叢　花香に誘引せられて詩叢に入る
招新結舊互争競　新を招き旧を結び　互いに争い競う
又醉相州汲古風　又酔う相州　汲古の風

敬次岳堂先生原玉　　窪寺貫道

相州花圃脱塵紅　相州の花圃　塵紅を脱し
臨港丘頭五彩叢　臨港の丘頭　五彩の叢
鷗鷺愉來大儒話　鷗鷺　愉しみ来る大儒の話
更知汲古稗官風　更に知る汲古　稗官の風

（中島記）

■平成24年度決算及び25年度予算

収入			支出		
費目	25予算	24実績	費目	25予算	24実績
会員年会費	357,000	408,000	事務費	290,000	268,331
懇親会会費	250,000	270,000	懇親会費	250,000	241,790
研修会参加費	50,000	47,500	各行事費	589,000	439,805
吟行会参加費	200,000	0	講師謝礼	60,000	60,000
サークル交流会	300,000	338,000	協賛金等	30,000	30,000
寄付金等	0	178,530	PR活動費	0	0
詩集頒布代	0	10,500	会費等振込料金	34,000	22,280
詩集発行費	75,000	0	詩集発行費	150,000	0
その他	8,000	8,000	臨時費・その他	20,000	27,505
合計	1,240,000	1,260,530	合計	1,423,000	1,089,711
25年3月末の連盟口座（ゆうちょ銀行）残高は442,277円					

【連盟の諸活動報告】

多彩な活動・出発進行中

初心者入門講座（七期生）

今年の初心者入門講座は二十三名が参加して、六月までに六回の授業を終えたところです。新聞・ホームページでの募集記事は「漢詩を作る」を強調したことが今年の特色で、女性六名男性十七名の皆さんです。

これから補講を九月十一日(水)、フォローアップ研修会を十月二十四日(木)に予定しており、それまで自主勉強をして、七言絶句一首を発表して全員で講評・討議することになっている。皆さんの大いなる成長が楽しみである。

講師陣は岡崎会長はじめ、七～八名を揃えて、授業の後半はいわゆる寺子屋方式で少人数ごとの指導をして、生徒各人の疑問に答えながら進めたこともあって個人ごとの格差を無くするのに効果的であり、この方式は不可欠のようである。

また欠席者に対して教材を送付し、前回の欠席者に補講をするなどの対応も落伍者を無くするのに繋がっている。

十月のフォローアップ研修を経て七期生の会が発足することを楽しみに、皆さんと漢詩作りを継続してゆきたい。

（中島記）

【秋の吟行会】晩秋の古都鎌倉を満喫しよう！

今年の吟行会は、古都鎌倉で十一月二十六日(火)実施される。残念ながら鎌倉は、先般の世界遺産登録を見送ったが、これまで数多くの文人が訪れ、幾多の漢詩が残されている。神漢連の吟行会は、過去二回、円覚寺と長谷の大仏で開催されているが、今回はいよいよ鎌倉本丸コースを予定している。

JR鎌倉駅西口に集合後、鎌倉初代将軍源頼朝のゆかりの「鶴岡八幡宮」に参拝後、頼朝が葬られた大倉法華堂(現在の白旗神社)の横の階段を登ったところの「頼朝の墓」にお参りする。その後、日本歴史上最初の漢詩人といわれる菅原道真を祀る日本三大天神の一つの「荏柄天神社」を訪ねる。最後は「鎌倉宮(大塔宮)」まで歩いてバスで鎌倉駅に戻る。鎌倉宮は後醍醐天皇の皇子の護良親王を祀る神社として明治天皇が造営を命じたもので歴史的には新しいものである。夫々に趣の異なる三神社を参詣するコースであるが、季節的には神社の境内、沿道の紅葉も楽しむことが出来ると期待している。

石川先生、窪寺先生もご参加の予定です、皆さんのご参加をお待ちしています。（吟行会の申込方法は十六頁のスケジュール表をご参照下さい）

（高津記）

全日本漢詩大会に六名の入賞

全日本漢詩連盟の十周年を記念する大会において、つぎの方々の入賞がありました。皆さんおめでとうございます。

特別賞　文部科学大臣賞　石川省吾

「黄山初陽」

拂曉冒寒孤倚笻　東天漸白泛奇峯
忽穿雲海一條箭　先射山巔蟠屈松

払暁　寒を冒して孤り笻に倚る
東天　漸く白んで奇峯泛ぶ
忽ち雲海を穿つ一條の箭
先ず射る山巔　蟠屈の松

曾て中国の黄山山頂で見た珍しい景色を詩にしてみました。

山頂は清澄な大気に包まれているのに、下界は大気汚染にまみれている異様な日の出でした。黄山の松の根元に陣取って、少しずつ白みかけた東天に浮かび出たのは、なんともどす黒さをまじえた赤い球でした。しかも相当長い間、半球のままという不思議な日の出だったのです。

結局、大気汚染を嘆く詩となり、我ながら暗い詩だなと思いつつ、見てあげると、おっ

しゃって下さった鷲野翔堂先生のお言葉に甘えました所、果たして、「こういう詩もあっても良いだろうがコンクール向きではない。ぱっと明るい表現を工夫せよ」とのご指導でした。

そこで、少年の頃、育った茨城県日立の海岸で太平洋からの日の出を見たときの印象を後半に置き換えるという、いわばフィクションを頭の中ででっち上げた次第です。

息を呑むような美しい雲海、七十二峰といわれる多くの奇峰からなる黄山ですが、最も著名なのは、此の山にしか育たないという黄山松です。朝日が先ず山頂の曲がりくねった松に当たったとして黄山らしさを表現したつもりです。

大会席上、石川岳堂先生から一頭地を抜くと、何とも過分なご批評を賜りましたが、鷲野先生の有難いご指導が無かりせば、此の句は生まれなかったわけで、只只感謝感謝して受賞を喜んでいる次第です。

特別賞　斯文会理事長賞　　中島龍一

「秋日漫興」

天青雲白恣閑游　天青く雲白く閑遊を恣いままにす
野寺門庭丹柿稠　野寺の門庭　丹柿稠し
欲盗村童伺回首　盗まんと欲する村童　伺いて回首
路隅石佛閉雙眸　路隅の石仏　双眸を閉ず

以前から、仏さんやお地蔵さんは目を閉じているので誰がお参りに来たのか判らないのではと思っていました。こちらを認識してくれなければご利益が無いのではないかと。

ある時ふと、開いた目を閉じたとすれば、お地蔵さんにもユーモアが湧いて何か軽い詩になると気がつきました。すぐに「地蔵双眸を閉じる」を結句にしてストーリーを考え、お地蔵さんが悪さに目をつぶって見逃したという意味の一首を創作しました。その後研修会で、地蔵は石仏に変更すべきと教えられましたが、そのまま一年間放っておきました。これに手入れをして、横浜の窪寺教室へ提出してみました。また「雅が無い」と言われるかなと覚悟していましたが、思いがけなく結句が面白いと少し褒められました。先生から褒められたのはこの時が始めてでしたから、其の日一日は優雅な気持ちで過ごしたのを覚えております。さらにその後、転句は直し直されて上のようになりました。

漢詩でもこのような何気ない内容が認められると知り、それでは全日本に応募してみようとなった次第です。今回の受賞は嬉しいのですが、反面、基礎と蓄積の無い者にとっては肩に石が載せられたような重圧を感じております。

秀作　　城田六郎

「懐福島舊友」

移居廿歳隔山河　居を移して廿歳　山河を隔つ
雪月花時定興多　雪月花時　定めて興多からん
聞説停杯專養老　聞説く杯を停め専ら老を養うと
宿痾消渇近如何　宿痾の消渇（しょうかち）　近ごろ如何

佳作　　古田光子

「颶風一過」

早曉始知風雨收　早暁　始めて知る風雨の収まるを
曳笻潦水滿田疇　笻を曳けば潦水　田疇に満つ
花飛草亂池塘畔　花飛び草乱る池塘の畔
喜看鳧雛浴日游　喜び看る鳧雛の日を浴びて游ぐを

入選　　小林榮一

「茗溪涼月」

一輪涼月十分秋　一輪の涼月　十分の秋
何幸良宵散歩遊　何ぞ幸いなる良宵　歩を散じて遊ぶ
獨領清風茗溪上　独り清風を領す　茗渓の上
騒人佇處桂香浮　騒人　佇む処　桂香浮かぶ

入選　　萬谷美次

「九十九里濱朝景」

煙波迢迢麗初陽　煙波　迢々として初陽麗し
曳網包圍海一方　網を曳き包囲す　海の一方
乍見銀鱗撥汀渚　乍ち見る銀鱗　汀渚に撥ねるを
衆人朗朗祝歌長　衆人　朗々　祝歌長し

バトル漢詩甲子園

激しいバトルで盛り上がる！

第2回サークル交流会

初心者入門講座で漢詩の勉強を始めた人達の6つのサークルに、昨年、詩吟の岳精流日本吟院の方々が立ち上げた漢詩研究会を加えた7つのサークル(その人数は約100人、連盟会員の約半分)の親睦交流を図る目的で、本年3月15日(金)に第2回サークル交流会『バトル漢詩甲子園』を開催した。

『バトル漢詩甲子園』とは、サークル間でお互いの詩の優劣を論じ合うと云う意味で、岡崎会長の強い要望で、面白おかしく命名したが、窪寺先生によれば、

「平安時代に“詩合(しあわせ)”という詩人を複数人ずつ左右に分けて、与えられた詩題の漢詩を作り、撰者(判者)が優劣を判定して勝負をつける文学的遊戯があり、959年8月16日に清涼殿の村上天皇の前で催されたのが最初とされている。そこでは“闘詩”の言葉も見られる」

ということで、偶然とはいえ良いネーミングであった。

バトルは、まず各サークルが過去1年間で最も出来がよい詩を会員の互選で2首選出。集まった14首を窪寺先生に提出。当日、各サークルから選ばれたバトラー(論者)7人がこの14首の詩の優劣について論戦を行った。終了後、初めて朱の入った窪寺先生の添削結果をスライドで写し、バトル内容の妥当性を含めた漢詩作法について先生の講義を受けた。講義終了後、先生が選ばれた優秀作品(ここで作者名をオープン)の表彰式を行った。続いて行われた懇親会で、各サークルの喉自慢が自分達が選んだ詩を朗朗と吟じ、懇親会を盛り上げた。

初めての試みであったので「バトル」の勉強の為に高校生の「読書甲子園大会」の見学に行ったり、先生の添削内容がバトラー達に漏れないように担当者を限定してスライドを作成したり、優秀作品名の入った封筒を田原副会長にお預かり願い、先生の講義開始直後に初めて封を切り、表彰までの1時間の間に表彰状を手書きするといったような色々な苦労があった。

幸い、各サークル代表のバトラー(論者)が良く事前勉強をしてきていて、予想以上の鋭い指摘と激しいバトルが続き会は最高に盛りあがった。窪寺先生の講話はこのバトルという前段があった為に、皆さん方には非常に良く理解できたようである。受賞したのは

・最優秀賞　秋夜偶成
　(五友会・5期生)　飯島　敏雄
・優秀賞　謁金毘羅宮
　(詩游会・4期生)　川上　修己
・優秀賞　秋水小景
　(以文会・6期生)　秋吉　邦雄
・佳作　秋夜
　(三水会・2期生)　大谷　明史
・佳作　遊沙木尼白郎峰
　(詩游会・4期生)　板本　健作
・佳作　樹下閑吟
　(金星会・1期生)　内村　才五

又、結句が素晴らしいという会長賞を、菅野省三、飯島敏雄、川上修己、秋吉邦雄の四氏が受賞した。

最優秀賞

秋夜偶成　　飯島　敏雄

夜闌輾轉睡難成　夜闌　輾轉　睡成難く
牀下孤蛬切切鳴　牀下　孤蛬　切切と鳴く
枕肘暫時懷往事　肘を枕にし　暫時　往事を懐かしめば
西風似語舊朋聲　西風語るが似し旧朋の声

その後、皆さんから出していただいたアンケート結果は総じて好評で来年も実施しろと云う声が多かった。但し、詩稿の数を減らしバトル時間を十分にとる、会場からの意見も聞く、等等の要望もあり、これらの声を集約して来年3月7日(金)に第3回交流会を開催する予定である。詳細は決まり次第別途ご連絡申し上げるが、各サークルでは今からご準備願いたい。

(三村記)

バトル漢詩甲子園論者顛末記

香取 和之

六期生「以文会」の論者となり、交流会の詩稿が送られてきた時には、正直途方に暮れた。各サークルの詩稿は、豊かな語彙・難解な漢語が並んでいてその意味すら分からず、レベルの違いで、詩の論評どころではない。困った挙句に、判らない漢字・語は漢語辞典「新字源」で全て調べることにした。初めての経験であり又膨大な時間を要したが、やり始めると結構面白く、また詩の意味がほぼ正確に判るようになる事も楽しいと感じた。

それでも、「明月院看紫陽花」では“楽天”を辞書で引くと、「天命を楽しむ」(楽天知命：易経・繫辞伝)と出ていて、当初は詩の意味が解せなかった。また、調べていると、漢字の用法でいくつも疑問が出てきた。

例えば、“到処”(「明月院看紫陽花」)は、“いたるところ”の意であろうが、辞書によれば“到”の意味は異なる。これは正しくは、“随処”又は“処々”ということが判った。

しかし、自分一人で調べたことには不安があり、以文会の有志の方々に集まって頂き、私の勉強ノートに基づいて全詩稿の検討会を行った。そして、色々と貴重な指摘を受け、やっと確信をもってバトルに向うことが出来た。

交流会では、以文会の二首の詩の各々の良さ(躍動感、雄大さ)を力説すると共に、もっぱら漢字の用法について発言した。“有時”、“到処”、“浅暖”など疑問を呈した語を、窪寺貫道先生が玉筆の推敲で全て直されていたのは、嬉しかったと共に、漢語を正しく使うことの難しさを痛感した。また、全詩稿を時間をかけて事前検討していただけに、窪寺先生のご推敲・講評は、自分にとって実にいい勉強になった。

最後に、漢詩サークル交流会の準備は大変だと推察されるが、このような機会を与えて下さった関係者の方々には、心から感謝申し上げる次第である。

“闘い”終って懇親会の一こま

事務局からのお知らせ

◆「漢詩鑑賞会へのお誘い」

現在、連盟に会員は約200名余、その半数は新人研修を経たサークル会員です。

連盟ではサークル会員以外の方々の為に、このたび次のような二つの漢詩鑑賞会開催を計画しています。同封のご案内用紙を読んで、ご参加希望の有無を葉書でご返信下さい。

・漢詩鑑賞会A
玉井幸久理事を講師とするレクチャー方式の鑑賞会。唐詩から適宜選択予定
来年一月～開催予定

・漢詩鑑賞会B
「唐詩選画本」をテキストとし住田笛雄監事をコーディネーターとする輪読会
本年十月～開催予定

◆「神奈川清韻第二集　詩稿募集」

三年前の五周年を記念して発行した神奈川清韻第一集に続き、その第二集を来年三月末を目標に発刊する事になりました。応募要領詳細は同封の「神奈川清韻第二集大募集」を読んで頂き、九月三十日までに奮って投稿下さい。

神奈川新聞連載

「漢詩への誘い」が実現するまで

会長　岡崎　満義

どんな形であれ、漢詩を新聞に載せたい、とずっと思ってきた。俳句、短歌、川柳、現代詩は毎週どの新聞にも掲載されている。西暦七五一年に漢詩集「懐風藻」が出版されて以来、明治初期まで日本文芸の背骨として大きな役割を果してきた漢詩が、いつの間にか忘れられ、一般の生活者の目に触れることはまったく無くなってしまった。明治維新以後、圧倒的な西洋文明の大波をかぶり、古くさい漢詩は沈没、和魂洋才の時代となった。大正五年、わずかに漢詩の伝統を引き継いでいた夏目漱石が亡くなり、翌六年、朝日新聞の紙面から漢詩欄が消え、他の新聞も右へならえで漢詩はマスメディアからすっかり忘れ去られてしまった。それからほぼ百年、奇特な人を除いて、漢詩の存在に目を向けられることはなくなった。

“漢詩ルネッサンス”はまず新聞紙面に漢詩を掲載してもらうことから始まる、とその道筋を探ろうと思った。神奈川県漢詩連盟にとっては「神奈川新聞」が大事な地元紙である。まず、昔勤めていた出版社で、書籍広告で知り合った神奈川新聞のSさんに再接触、話をきいてもらった。好都合なことに、Sさんを通じて海老名市いちご文学賞を創設するので、選考委員をしてほしい、と言う話が出て、Sさんとの関係が深くなった。五年ほど前のことだ。

Sさんの紹介で文化部長の西郷公子さんとのルートが出来た。最初は漢詩といってもピンとこない様子だったが、東京新聞に石川忠久先生の「かながわの漢詩」という連載例もある、どんなスタイルでもよい、せめて春夏秋冬に一回ずつでも、漢詩にスペースを割いていただけないものか、とたびたび陳情した。丁度、私の雑誌編集者時代のことを書いた「人と出会う」という本が岩波書店から刊行された頃で、一冊贈呈するとすぐ読んでくれて面白かったらしく「岡崎さん、漢詩エッセイ風なものを書いてみますか。ただし、日曜日の文化欄は書きたい希望者が多く、第五日曜日に六百字のスペースということなら何とかします」ということになった。回数は少なくても、とにかく漢詩の橋頭堡ができる！と喜び勇んだ。ところが、話が決まった直後に西郷文化部長は川崎総局長に“栄転”してしまい、此の話は又ふり出しに戻るのでは、と心配したが、後任の青木幸恵部長がうまく引き継いでくれて、平成二十四年四月の第五日曜日から「漢詩への誘い」シリーズが始まった。四月、七月、九月の三回の第五日曜日が終わって、次は二十五年三月まで半年のブランク。御礼方々、ワインをぶら下げて青木さんに挨拶に行くと「あの連載わりと評判がいいので、来年から第一日曜日に掲載ということにしましょうか」と思わぬ吉報がもたらされた。月一回になるのは願ってもないことと喜んでいる。

内容はご覧の通り、風流風雅の世界から遠い時事風俗人事の七言絶句ばかり載せている。新聞の読者の大半は、漢詩に全く無縁の人だろう。そんな人に「ヘェ、漢詩ってｉＰＳ細胞の山中伸弥教授や中国の民主人権家のことなんかも詠めるのか」と思ってもらうことが漢詩に少しでも興味をもってもらえる小さな入り口になるのではないか、と思って書き続けている。

研修会　益々盛況

春の研修会を終えて

城田　六郎

平成二十五年度春の研修会は、三グループに分けて実施し、詩稿提出者は五十四名の多きを数えた。特に今回は出稿はしないが、研修会の見学者が七名あり、大いに歓迎すべきことと思う。又新人研修を受けている七期生も六名参加(うち二名は詩稿提出)するなど頼もしい限りです。

今回三グループに分けたことにより、時間に余裕が出来て十分に議論を尽くし、研修の実を挙げることが出来たものと考えております。

今回も各グループの上位入賞者には岡崎会長より奨励のための賞品が授与されました。

各グループの一位作品と感想は次頁の通り。

Aグループ一位

題王右軍展

松本征儀

書聖雄文鳩帝闕　書聖の雄文 帝闕に鳩(あつ)まり
群賢墨客滿高堂　群賢 墨客 高堂に満つ
龍跳虎臥是神韻　龍跳 虎臥 是れ神韻
入木三分春**節**芳　入木 三分 春節に芳し

去る二月、東京で王羲之展を参観した。王羲之としては、史上最大規模で、日本で最近発見された新資料の展示もあった。

昔、今は亡き書の師から、千字文や集字聖教序などで指導を受け、蘭亭の話をよく聞いた。そこで今回、大胆にも、王羲之展の漢詩を思い立ち、恐る恐る詩稿を提出した。研修会で、図らずも高得点を頂き、内心我が耳を疑った。

試作では、手許の王羲之関連の本や資料を紐解き、既習の漢詩ルールや教えを思い出しながら、構想を練り、詩語らしきものを拾い集めていった。

初稿では、複数の辞典を引き較べては、見直し書き直しを行った。更に、日を置いては眺め、書き直しを繰り返したが、考え過ぎて或は改悪したことがあるかもしれない。殊に、転句には悩んだ。果たせるかな、研修会では転句、特に結句に関し、会長を始め複数のご意見があったので、今後更に推敲に努めるつもりである。

Bグループ一位

枯　**梅**

三村公二

不知往昔是誰栽　知らず 往昔 是れ誰が栽しか
老幹槎牙僵臥**梅**　老幹 槎牙 僵臥(きょうが)の梅
纔見殘枝三兩蕾　纔(わずか)に見る 残枝 三両の蕾
詰**朝**華發尚春魁　詰朝 華(はな)発いて 尚春の魁たらんや

小林一茶の俳諧歌「老木桜(おいきざくら)」に“今にも枯るるばかりなるが、(略)倒るるまでも花の咲く哉”という一節がある。これは日頃から「年はとったがもう一花」と思っている私の心境にピタリだと、桜では漢詩になりにくいので梅に変えて作ってみたのがこの「枯梅」という詩である。桜はまだ倒れていないのにこの詩の梅は既に倒れていたり、見直したい字句も多いので、研修会で頂いた皆さんのご意見を参考に更に推敲を進めるつもりである。

Cグループ一位

春日郊行

秋吉邦雄

蕓薹**花**發野坰田　蕓薹(油菜) 花発く野坰の田
畦上行**憐**蝴蝶旋　畦上行くゆく憐れむ 胡蝶 旋るを
或是莊**周**夢中影　或は是れ荘周夢中の影ならんや
飄飄栩栩弄春天　飄々 栩々として春天を弄す

春麗らかな某日郊外を散策した折の状景である。黄一色の菜の花畑にさしかかると、小さな紋白蝶が菜の花の間をひらひらと舞っているのが目に入った。漸く訪れた春の光の中を、いかにも嬉しげに遊び戯れている蝶のさまを見た時、「荘子(斉物論)」の胡蝶の夢を思い出し、作詩につなげることにした。

まずは、ひらひらと嬉しそうに舞いながら、「春天」を愛でているかのような蝶の姿を結句に置くことにした。「飄飄」と「栩栩」(荘子の栩栩然から)の二つの畳語を結句に並べるのは如何なものかとも思ったが、敢て感じたままを詠み込んだ。

転句は、春の白昼夢に似た雰囲気を、荘周の蝶夢と重ね合わせ、「或是」と軽い疑問の形に置いた。

舞台づくりの起句は、郊外の菜の花畑ということで「蕓薹」(あぶらな)と「野坰」(郊外)を使い、承句は蝶が菜の花の間を舞いめぐるのを可愛いと思いながら歩き続けたとした。

初学の身で図らずも高得票を頂き汗背の思いであるが、漢詩の持つ奥深い魅力に惹かれながら、今後一層の研鑽を積みたいと思っている。

【第8回神奈川県漢詩連盟総会】

石川 忠久先生講演録

漱石に見る漢字文化の受容

その一　漱石と二松学舎

私はこの神奈川県連でお話しすることを非常に楽しみにしています。何しろ神奈川県連はお世辞抜きですごい。神奈川の新方式は大変なアイデアです。今年の七期生の中には昔の私の教え子がいます。嬉しい限りです。

さて、今日は夏目漱石の話をします。この人のことは皆さん耳に親しいと思いますが、終戦から今日迄六十八年になるが、終戦の頃にはまだ生きていてほしかった人です。しかし、大正五年に早死した。終戦の頃まで生きていたとすれば七十台半ばだった。ずいぶん昔のように思えるが決して遠い人ではない。慶応三年生まれ、明治と共に生きていた人です。亡くなったのが大正五年ですから、明治と共に一生を終えたと云える。丁度彼が学齢に達する頃に小学校制度が整っていた。従って、明治の新しい教育制度と共にずっと生きた人です。これが先輩達と違う処です。少し先輩は、まだ小学校制度が出来ていなかったので、勝手に勉強して、勝手に自分の趣味を見つけた。例えば岡倉天心。嘉納治五郎。こう云った人達は夏目漱石より五才位年長だったから、彼らが学齢に達した頃にはまだ小学校の制度が出来ていない。だから随分違う。二人とも東京大学を出ているが、出た時は十八才とか十九才です。非常なスピードです。学校制度が整っていなかったから、優秀な子供はどんどん飛び級する。森鷗外も医学校を卒業したのは十九才。今は医学部は二年余計にやる必要があるから、随分ゆっくりとなる。漱石の時には制度が出来ていたからそれによって、しかもゆっくり修業した。漱石が大学を卒業したのは満二十六才。明治と漱石の満年齢は同じ。五年先輩の人達は十八才、十九才で卒業しているからスピードです。嘉納治五郎が大学予備門、後の第一高等学校ですが、この校長をいきなり勤めた。まだ若い時に校長で、随分差がある。ゆっくりだった事が彼の文筆生活に影響していると思う。もう一つ、漱石は江戸の人で佐幕派。京都や薩長とは反対の徳川幕府方の人です。彼自身は武士ではないので、武士とは少し違うが、高田馬場辺りの名主の家の出ですが、裕福な家だった。兄が三人居るが全員東大を出ている。あの頃大学に行けるのは、かなり裕福な人です。月謝が高かったし、その上ゆっくり勉強させて貰えると云うのは、相当裕福な家柄だった。兄三人も東大出と云うことでも分かります。このように、明治と共に人生が進んだと云うことと、佐幕派であると云うことが、彼の大きな土台になっています。

石川忠久先生

彼は銀座の泰明小学校を出て、今の日比谷高校、昔の一中、東京に一つしかなかったから一中です。ここに入った。ところが、やめてしまうのです。原因ははっきり分かっていない。面白くなかったのがどうも先程云った彼の家にある佐幕派的な空気と相容れないものが学校にあったのでしょうか。そして彼は二松学舎へ来る。明治十四年、即ち満十四才で一中をやめて二松学舎に来た。二松学舎は明治十年の創立でまだ出来たばっかり。作った人は三島中洲。倉敷生まれ、備中高梁藩の武士だったんです。明治御一新の時には三十九才。明治十四年にはもう五十才すぎですが、明治五年に師の山田方谷に推された。この人は今、日本のケインズと云われている人で、藩の借金十万両を八年で返済し、更に十万両貯蓄したと云う人でした。明治政府が出来た時に大蔵大臣になるよう求められたが、七十才と云うことで断わり、代わ

りに弟子を推した。一人は川田甕江、もう一人がこの三島中洲です。この二人は同年で、お互いに研鑽し合ったのだが、川田は、老いらくの恋の川田順の父親と云ったほうが早いか。この二人がこういう事で明治政府に支えた。三島中洲は早くも明治六年に、当時あった土浦県の、今の茨城県と千葉県の大部分を含んだ大きな県です。県庁所在地は土浦で、そこに裁判所があったが、その所長になった。ボアソナードと云うお雇い外人から半年位教わった。フランス民法の専門家で民法を学ぶために明治政府が雇った。一所懸命に勉強した様子が今残っているノートで分かる。とに角、中年迄武士だった人が、ダーツとフランス民法を身につけて、すぐに土浦の裁判所の所長になった。中洲の話はこの辺で止めますが、中洲も詩が上手で、今度機会があったら中洲の話もしたいと思っています。中洲は明治六年に所長になって、ものすごく実績を上げる。たまっていた案件を全部消化した。彼の司法官としてのモットーは拙速で、拙速は巧遅に勝ると云っている。遅くて巧みは駄目で拙速が良い。遅くては待っている人が可哀想。待たしてはいけない。仮に少し甘くして世に出して、又再犯したら又捕まえればよいではないかと云っている。大らかな取り扱いで、これは今の裁判官に見せたい。今の裁判は長い。これは迷惑なことです。その間の生活もあるし、中洲は拙速をモットーとして処理したので沢山たまっていた案件を全部決めた。その結果、大審院にまわされた。今の最高裁判所です。わずか二～三年の間にです。それで、そこを辞めた時に、退職金を貰った。いくら貰ったかは知らないが、それで二松学舎を作ったのです。何年も勤めていない。辞めたのは明治十年ですから、最高裁の長となって相当貰ったのか。この三島中洲が作った二松学舎に、明治十四年にはまだおんぼろだったと思うが、そこに漱石少年が入った。これは私の推測だが、ここに佐幕派としての家の空気が働いたのではないかと思う。

　三島中洲の仕えた藩は備中の高梁藩。この藩は石高僅か五万石。しかし、殿様は老中です。板倉勝静侯は将軍とも血がつながる人で抜擢されて老中になった。そう云う藩でありますから、三島中洲は明治五年迄はひっそくしていた。新政府が出来て、自分達はくびになったのだから。これがたまたま明治政府に見出されて活躍の場を得た。この人が作った学校ですから矢張り佐幕の風に合うものがあった。この辺はまだ誰にも云っていない私の新説です。つまり夏目漱石の世に出る前のことはかなり分からないことが多いのです。荒正人は夏目漱石コンコンチキで毎日毎日の事跡を追って、分からない日が無い位に追いつめた人ですが、彼でもどうも分からない処があると云っているのが若い頃です。手紙とかが残っているわけでもないし。併し、一中をやめて二松学舎に来たのは、矢張り三島中洲にひかれたと思う。

　そこで1年半位、みっちりと勉強した。その頃のカリキュラムが残っているが、基本的な漢籍は当然のことでありますが、漢詩を作ったり漢文を書いたり、と云うこともみっちりやっている。これが大きな基礎になった。もし仮に、彼が一中を続けて東大へ行っていたら、あの夏目漱石ではなかったと思う。ここで彼は土台を作ったのです。しかし、兄達に習って東大へも行かねばならない。そのためには英語もやらねばならない。そこで二松学舎は一年半でやめて、英語の塾へ行き英語を勉強して東大に入った。ですから本当にやりたかったのは漢文だったと思う。三島中洲の作った学舎をわざわざたずねてきた。後年に述懐しているが、非常に汚かったとか。併し、彼の性格に合ったらしい。

　今私が関係している湯島聖堂は幕府の学校だったから御一新の時につぶれました。その後いろんなものに使われたが、書籍館と云う図書館があった。書籍と書いて「しょじゃく」と読みます。ここへ本を見に行っている事が分かっています。ついでに云うと嘉納治五郎もここで勉強したらしい。今の大成殿のある処の中が書庫になっていた。廊下があって、そこが閲覧室になっていた。そのようなことで、湯島聖堂ともゆかりがあります。

　私事だが、私の家も旗本です。だから漱石の気持ちと一脈相通ずるものがあります。薩摩、長州の方が居られるかも知れないが、ごめん下さい。薩長は嫌いです。そう云うわけで私は昔から漱石に対して非常に親近感を持っています。「坊ちゃん」だとか「三四郎」だとかを読むのは当然ですが、何となくひかれるものがあります。荒正人が年譜を作ったが、集英社が漱石文学

全集を出した時に語釈してくれと頼まれて手伝いました。そう云う事もあり、漱石には深い親近感を持っています。

なお、ここにある新書は吉川幸次郎氏の「漱石詩註」です。お持ちの方も多いと思う。良く売れた本です。一九六七年、昭和四十二年、吉川幸次郎氏は西の方の人なので、佐幕と云うことは無いと思うが、どちらかと云うと、漱石と似ているのではないか。わざわざ詩註を出した。と云うことは、彼には近い気持ちがあったのかと思う。併しこれは、そう云っては何だが、そっけない注釈書です。わざとそっけない。この人にはそういう処があります。そっけないのは偉いからです。話は一寸それるが、私がNHKからラジオ番組をやることになった時にNHKがこう云う番組の場合は吉川さんの処に挨拶に行ってくれと云う。で、NHKの職員と一緒にわざわざ京都に行きました。まあ割りに打ちとけて下さいましたが。私も先生には悪い感じは持っていない。しかし、この本の場合は読者のためにもう少し親切さが欲しかった。私はこの本の代わりを作りたいと思っているが、もう時間も無いのでどうなりますか。

さて、漱石の一生の中で一番大きな出来事は正岡子規と出合った事です。子規と同級生になった。慶応三年の同年生まれです。但し、漱石の方が正月生まれで早い。旧暦の正月五日生まれで、新暦にすると二月十日あたりになるらしいが。子規は九月生まれ。ですから同年生まれであっても今だったら学年が一つ違うでしょうが、同じ年、明治十七年に大学に入学しています。同級生になっている。しかし、同級生になったからと云ってすぐに親しくなったのではありません。今もそうかも知れないが、東京者は自分達で固まってなかなか他所者が入れない。で、すぐには仲良くはならなかったらしい。後に、大分後になって趣味が同じと云うことが分かってから仲良くなったが、ずいぶん後のことです。明治十七年に予備門に入ったのだが、その頃予備門は五年あった。予備門で五年勉強しないと大学に入れなかった。今は教養課程は二年です。それで更に二年勉強して四年で卒業する。この頃は五年やって三年、八年かけた。しかも彼は一年落第したから九年やった。予備門の二年の時に落第した。正岡子規も落第した。別に示し合わせて落第したわけではない。子規は一年で、漱石は二年で落第している。それでぴったり合った。こう云う偶然がある。漱石の場合は先生が再試験を受けたら上に行かせると云ってくれたが、それを本人は断わった。今迄は怠けていた。これからは一所懸命にやります。もう一年やりますと云ったらしい。この辺が矢張り江戸っ子です。人の情けなど受けるものかと云う気風があるのかな。で、二年生を二度やった。ために、二人は会った。予備門の五年は予科三年、本科二年だったが、彼らは本科に入ってから知り合った。明治二十二年、本科の一年の頃です。で、最初は子規の方が兄貴風を吹かしていた。子規は漢学者の家に生まれています。伊予松山の藩儒、大原観山と云う人の孫です。大原観山は子規を可愛がって教えたけれど、子規が九才位の時に亡くなった。でも、その薫陶を受けている。藩儒と云うことは武士です。武士が普通に受ける教育で、鼻垂れ小僧の頃から漢籍を読んでいる。ここが漱石と違う処です。漱石は町家ですからそのような教育を身につける習慣は無かった。多少あったかもしれないが、とに角自分の中にその部分が不足していると云う自覚があったか。それで二松学舎に来た。

（住田記）

（以下の続きは次号に掲載予定です）

入会案内

神奈川県漢詩連盟は本紙に掲載したような諸活動を行っている漢詩を楽しむための会です。友人・知人にも是非入会をお勧め下さい。

●年会費
一般会員　二千円　　賛助会員一口一万円

●初心者講座
毎年四月～六月に開催しており（月二回、計六回）受講料は二千円ですが、そのまま入会すれば受講料＝初年度の年会費となる特典があります。

●問合せ・申込先
＊電話・ファックス
045-895-2662（事務局長桜庭宛）
＊ホームページ（→Eメール）
http://www.shinkanren.sakura.ne.jp
（→shinkanren@email.plala.or.jp）
入会申込書がついています

会員便り

思いは　会員さまざまです

儒者　大橋訥庵

岡崎　勝郎

天保八年、大阪で大塩中斎が救民義挙で朝野を驚かし、同十年、江戸で崋山・長英が蛮社の獄に縛せられていた頃、佐藤一斎の下で文選正本の抄の写しに切磋琢磨していた塾生　清水正順がいた。父が在野の儒学者でその門下に、若き日の幽谷・拙堂・艮斎らがいた。正順の師一斎もまた彼に兄事した一人であった。

正順は二十代後半、日本橋の富商大橋淡雅の娘婿に入り大橋姓を継ぎ、それまでの飯山藩を辞して日本橋の橘町に思誠塾を開く。天保十四年宇都宮藩の士籍を賜り藩主戸田忠温の侍読となる。

嘉永六年。ペリー浦賀来航と時を同じく「闢邪小言」を著し、官許を得んと昌平黌の林家へ披見を請す。併し夷船襲来を理由に沙汰は封じられる。「是は西洋学を罵りたる書、其の内に朱子究理の説を主張し云々」と友人への書簡にあるように尊皇攘夷を宣揚した冊子であった。刊行もせられ久留米の神主で攘夷強行派の真木和泉の絶賛の書となる。

白痴相率慕腥羶　漸看華民欲祭妖
撲滅妖芬果何日　慨然撫劍問蒼天

正順の詩である。次に刊行した「隣疝臆議」は国体の尊厳と華義夷利（華国は義を尊び夷国は利を貪る）の弁を尊攘論に結びつけ、これを鼓吹した書文。「昌黎（韓愈）の争臣論に擬え候て仮名物十五枚斗りに認め候て水公（徳川斉昭）へ呈じ候共、是亦馬耳東風何の効も無く候」と友人への手紙。是亦とは先著が林家から無視されたことを指す。

併し両書は多くの志士達に読まれた。吉田松陰の野山獄読書記に「安政三年二月隣疝臆議十八日了大橋正順著一冊」。

大老井伊の大獄は安政五年、翌年正順は頼三樹三郎の刑死を聞き、塾生を小塚原に従え秘かに屍を掘り起こし懇ろに葬し直した。この時の詩がある。

刑死累累鬼火青　枕頭時覚北風腥
婆心憂世夜難睡　起自窓端見大星

当時正順（訥庵）は住まいを小梅村（現向島）に移している。安政二年の大地震で日本橋の家が倒壊したため。この頃より偽名や隠語を使う浪士達がここに集まっては散っていく。目的は老中安藤信正を斬奸するの謀。

そもそも安藤の公武合体の企てはその真意が幕府の体制強化にあった。和宮降嫁は名目とは別に内実は機あらば宮側を廃帝に持ち込もうとの目算にあった。との専らの噂でこれが尊王の志士たちを憤激させた。

文久二年一月、坂下門外に安藤の駕籠を襲った水戸・越後の浪士七人はその場で衛士に斬殺され、安藤は重傷（桜田門外の変はこの二年前の万延元年）。じつは訥庵は事件の数日前に捕り方に縛せられ伝馬町へ送られている。入獄七カ月後嫌疑不十分で釈放。身柄を宇都宮藩戸田家へ預けられるも獄中での衰弱が甚だしく数日して、それでも畳の上で息を引き取った。享年四十七歳。

書生講武亦風流　閣筆時磨八尺矛
近日洋夷猖獗甚　神州此氣果知不

訥庵自ら意に叶った作、とした詩である。

眼中人

副会長　田原　健一

漢詩の勉強会の話である。「眼中人」という言葉に出会った。

阿藤伯海の「大簡詩草」の中の一詩である。

今夕高楼会友朋　清筵酌酒酒如澠
棄置青眼無勧酒　眼中人老瘦于僧

「今晩高楼で友達と酒を飲んだ、その中で周りとあまり交わらずポツンと自酌の男がいた、目の前のその老人は坊さんみたいに痩せていた」程度の読みこなしであった。

ところが、結句の　眼中人　とは、もうひとつ意味合いが強いのではと異論が出た。

眼中人　はレッキとした熟語であり、詩語であると。大漢和には「常に想望して心目に懸かっている人、心に想って望を嘱する人」とある。この詩でも“えらく気に懸かっている人”という解釈をすべきである、という事になった。皆、

何となく大発見をしたような気分になった。

「眼中人」という字句を、李白も杜甫も使っている。杜甫の「青眼高歌望吾人　眼中之人吾老矣」、李白の「佳期大堰下　涙向南雲満不見眼中人　天長音信断」とある。

現代日常語としても通用しそうな、ある意味、長い歳月を生き残ってきた貴重な詩語である、これを使わない手はない、早速使おうという事にあいなった。

詩友中島氏が一詩作って教室に出した。

初夏茶坊風景
通衢浴日卓椅陳　男女露天珈琲親
紅粉読書屡窺巷　分明約待眼中人

巴里の街角のカフエの風景をイメージした洒落た詩である。

窪寺先生の雌黄の筆が加えられた。太字のところである。

通衢**晴**日卓椅陳　男女露**塵**珈琲親
紅粉読書屡窺巷　分明**有**約**意**中人

当然のことながら、中島氏は「眼中人」について短く説明し、暗に「意中人」が元に戻されることを期待した。

先生は結句の中二字について、〔約待〕？と考え、約は待つなんて字句は無い、〔有約〕に修正された。となれば、次に続く「眼中人」は可笑しく「意中人」と添削されたのである。約束している恋人を待って周りを窺っている風景、是なら素直にわかると。

一方、中島氏は、目をつけている彼女（或は彼）と話をするような接触のチャンスを狙っている状態を詠いたく、「眼中人」をそんな意味で使ったのである。残念ながらわが友の迂闊は〔約待〕の二字が通用しなかったことにあると思われる。

なお、「意中人」は立派な詩語で、韻書に「眼中人」と並んで直ぐ横に載っていた。この言葉は、大漢和には〔心に思い慕う人、心中の人、恋人〕とある。今となれば大騒ぎするほどの話ではなかった。とは言え、中島氏も私もまだ「眼中人」の字句がピタリと納まった詩を諦めてはいない。

◇追記「眼中無我眼中人」

会報に載せるべく念のため、窪寺先生の了承を得んとこの原稿をお見せした。経過を知られた先生、そうであったのか、となればこのような改作案では如何とお示し頂いた。

初夏茶房戯作
通衢晴日露塵茵　開巻仙姝顧眄頻
即是分明待郎久　眼中無我眼中人

つまり珈琲を飲みながら本を読んだりしている風だが、そんなことはポーズで彼女の頭の中は眼中の人にありそうだと言う意味である。

「眼中無我眼中人」の結句は、読書しているような、していないような女人の風情が見事に描写されている。畳語もこのように使えば良いという見本を見せられたようで、はは－と恐れ入った次第である。

ホームページ作成者のつぶやき

飯島 敏雄

住いが同じ秦野市ということで横浜での漢詩の集まりからの帰路、水城副会長と同じ電車に乗ることがたびたびありました。あるときいろいろ雑談する中で、ホームページを作ったことがあるという話をしたことがきっかけで、神奈川県漢詩連盟でホームページを四月より開設したいので協力して欲しいとの相談を昨年二月初旬に受け、前の経験を生かせば何とか出来るのではないかと安請け合いをしてしまいました。早速会長はじめ役員の皆様に見ていただく原案を作ることになり、ホームページ作成ソフトを使って作成作業を始めました。漢詩は通常縦書きですので、縦書きのホームページを作ろうとしました。ところが、ホームページ作成ソフトは横書きが基本になっていて、縦書きは出来るものの、一部を修整するには一段落分を書き直さなければならず、また絵のまわりへの文章の配置も今までの知識では思ったように出来ないことに気づきました。これでは二週間後に原案を見せることは難しく、引き受けたことを後悔しました。急いで全日本漢詩連盟のホームページを見ましたら、横書きになっているではありませんか！　愛媛県のホームページも同様でした。それらを見て正直、ほっと胸を撫で下ろしました。早速原案を作り、役員の皆様に見ていただき、先ずはこの原案をベースに出発しました。

ホームページの一ページ目は左図のように、左に各記事に飛ぶための項目の一覧、右に有名な漢詩、そして中央にはその漢詩の情景に合うような絵(または写真など)を挿入することにしました。漢詩と絵は毎月変え、会員の作品、エッセイ・漢詩と私・は二ヶ月毎に更新することになりました。漢詩は玉井先生に選んで頂きその解説もしていただくことになりましたが、絵の担当をどなたかにお願いするのを忘れ、行き掛り上、私が担当することになりました。記事が早めに集まり、一カ月半の短い期間でしたが、二〇一二年四月一日午前零時に神漢連のホームページが立ち上がりました。

神漢連HPのトップページ

ところで、四、五、六月まではWeb上から詩に合うような写真が版権付きで安い価格で入手できましたのでそれを使わせていただきました。七月はWeb上にも適当な写真が見当たりませんでしたが、私の家の後の山の景色がその詩に合っていましたので、それを撮影して挿入しました。しかし、八月以降はどこを探しても詩に合うような絵がなく、困って思案の挙句、絵を描いて褒められたことはありませんが自分で描く以外に方法はないと覚悟しました。早速色鉛筆(今は筆でなぞると滲んで水彩になる)を購入し、先ず鉛筆で下書きし、その上に薄い白紙を載せて色鉛筆でなぞり、さらに水筆で色鉛筆の絵の具を溶かして水彩画のようにしました。妻にその絵を見てもらうと、「大変ねー」の一言だけで、褒め言葉は返ってきません。

四か月ほど厚顔にも私の絵で済ませましたが、妻にも褒めてもらえないような絵のままでは拙いと思い、水城副会長とホームページ責任者の三上氏にどなたか絵を描いてくれる方がいらっしゃいませんでしょうかと尋ねましたところ、絵の専門家がいますよということで、それからは会員の國田公義氏や副会長の田原健一氏が描いてくださることになりました。ああ、これで絵から解放されると思うと何とも言えぬ気楽な気分になりました。

両氏の絵で、ホームページの一ページ目は見違えるように素晴らしいものになりました。ホームページ作りも一年を過ぎ、少しずつ作成技術も覚え、今年四月からは動画や音声も導入しました。文字を大きくして見やすくしたつもりですが、未だ改善の余地も多々あります。皆様のご意見をお伺いし、より充実したホームページになるよう心掛けたいと思っておりますので皆様からの忌憚のないご意見をお伺いできれば幸いです。

このHPを見て下さった方の中から漢詩を作ってみたい、漢詩初心者入門講座を受講したい、また神奈川県漢詩連盟に入会したいという方が出てきてくださればこの上ない喜びです。

ホームページへのご案内

方法１　検索エンジンから
下記のホームページアドレスを入力(Enter)する。
http://www.shinkanren.sakura.ne.jp

方法２　検索エンジンを使って
キーワード「神奈川県漢詩連盟」で検索する。

※検索エンジン　「Yahoo! JAPAN」 http://www.yahoo.co.jp/
「Google」 http://www.google.co.jp/ 等

■訃報　乗竹恒男氏　ご逝去

神奈川県漢詩連盟の会員、乗竹恒男氏は、七月三日、逝去されました(享年八十四)。
ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

会計担当からのお願い

年度会費未納の方は、同封の振込用紙(吟行会と同用紙)にてお振込み頂ければ有り難くお願い申し上げます。

シリーズ　漢詩の話

漢詩と私

執行役理事　城田六郎

私が漢詩の勉強を始めたのは、ちょうど七十歳になった時で、まさに晩学の最たるものです。偶たまＮＨＫラジオで石川忠久先生の「漢詩への誘い」という講座があることを知り、さっそくテキストを購入し先生の名調子に引き込まれ、深入りすることとなった。

このテキストはテーマ別になっており、今でも時々開いて参考にしております。特に語訳、大意のほかに、その語の成立の背景や評価など初心者にとって極めて親切な構成となっている。このラジオ講座が平成十八年九月をもって終了となった時は大変残念に思いました。

ラジオ講座の代わりに、同じ石川先生の春夏秋冬四季歳時の詩各一〇〇選四冊を求めて勉強することにしました。中国の詩人の詩集には詩を四季に分類する習慣がないので、初心者の時には風景の詩を作ることが多いので大変参考になります。

ラジオ講座は一方通行ですので質問や添削が不可能なので、朝日カルチャーセンター横浜の窪寺教室に入れていただき今日に至っています。窪寺先生から常に適切なご指導をいただき、非才に鞭打つ今日この頃です。カルチャーセンターに入会して良かったことは、多くの詩友に恵まれたことです。特に会員を中心に設立された漢詩連盟に加入することによって、吟行会、研修会、交流会への参加する機会が増えたことは大変有意義に思います。

初心者にとって一番の難題はいかに適切な「詩語」を用いるかということです。同じ漢字を使っていても日本語の意味と詩語との間に大きな相違があるケースがしばしばあり、まず詩語に慣れることに意を注ぎました。詩語を覚えるため自己流のメモ帳をつくり、今では八冊目となっています。高校時代の英語の単語帳を思い出します。

私の愛読書に唐詩選があります。岩波文庫本の下巻には七言絶句百六十五首が収められており、これを繰り返し読んで詩語、修辞法などの習得に努めています。私個人としては唐詩選よりも宋詩のほうが身近に感じられます。個々の詩人の名を挙げれば蘇軾、黄庭堅、陸游などです。

五月に京都に旅行する機会を得たので、念願であった頼山陽の山紫水明処と石川丈山の詩仙堂を訪れました。前者は予約制であったので中に入れず籬越しに茅葺の屋根を見るだけでしたが、詩仙堂の間と庭園を拝観しました。最近は観光名所となっているらしく観光バスで団体客が押し寄せるので、雰囲気が害われているのが残念です。そこで詠んだ詩が次の一首です。

過詩仙堂　　詩仙堂に過る

洛北山腰凹凸窠　洛北の山腰　凹凸(おうとつ)の窠(か)
竹涼生處緑陰多　竹涼生ずる処　緑陰多し
唯聞庭院稱揚語　唯　庭院称揚の語を聞くのみ
待坐詩堂遊客過　詩堂に坐して遊客の過ぐるを待つ

(注)　凹凸窠は詩仙堂の正式名称です

山梨県の全日本漢詩大会のお知らせ

日時　九月二十九日（日）午前十時～午後二時半
会場　韮崎市東京エレクトロン韮崎文化ホール
式典・表彰　十時二十分より
記念講演　十一時半～十二時半
「日本人の漢詩～山水をうたう詩～」
石川忠久先生
吟行会　九月二十八日（土）午後一時より
交流会　九月二十八日（土）午後五時半より
問い合わせ先　第二十八回国民文化祭実行委員会
電話　〇五五一・二二・一一一一（内二六五）

二十五年後半のスケジュールをカレンダーに記入しましょう

●秋の研修会

春と同じ「選句方式」で三グループⒶⒷⒸに分けて実施します。

・期　　日　Ⓐ十月十日(木)／Ⓑ十月十六日(水)／Ⓒ十月二十二日(火)
・時　　間　いずれのグループも午後一時～五時
・場　　所　神奈川県近代文学館　二階　中会議室
・参加申込　本会報に同封したはがき(吟行会と同書面)にて九月二十日まで。
　　希望日も記入して返信して下さい。
・詩稿提出先　〒二五九―一三〇四　秦野市堀山下六〇〇―九　水城まゆみ宛
・提出締切　九月二十日(金)提出先着

●吟行会(三頁記事参照)

・日時／集合場所　十一月二十六日(火)午前十時／JR鎌倉駅西口
　(改札口を出て右へ30メートル程、時計台のある小広場)
・目的地　八幡宮～白旗神社～荏柄天神～鎌倉宮
・昼食および懇親会　「鎌倉論語会館」　鎌倉市御成町一三―一三　佐藤敏彦様方
　(電話〇四六七―五〇―〇三〇三)
・柏梁体　課題韻字による平仄不問の七言一句。任意提出ですが、
　懇親会で石川先生が秀句を選出します。
・申　込　同封はがき(研修会と同書面)にて九月二十日まで返信して
　下さい。
・参加費　四〇〇〇円(同封振込用紙にて十月末までに振込んで下さい)
・照会先　高津有二　〒二四三―〇四一二　海老名市浜田町一六―一九
　(電話〇四六二―三三―七六四一)

●神奈川清韻第二集発行(同封の寄稿募集要領参照)

・投稿締切　九月末
・提出先　サークル会員は各サークル責任者まで。一般会員は左記宛。
　〒二二六―〇〇〇二　横浜市緑区東本郷二―二三―二四　城田六郎

●サークル交流会

期日　平成二十六年三月七日(金)　詳細は次号十五号にて。

編集後記

小学校での英語教育が取り沙汰されているが、国際化・グローバル化への的確な対応は先ず自国の文化がしっかり身についていることである。そしてその国のあらゆる文化の基礎は母国語であり、外国語を学ぶについても母国語がしっかり身についていることが肝要であろう。

日本人は先ず日本語をしっかり身につけていることであり、そして肝心なことは、日本語の骨格は漢字である。そういう意味で漢詩も、作って、あるいは鑑賞して楽しむだけの「好事家の古典」にとどまるのではなく、現代の、日常生活にも活かせるものでありたい。

神漢連も七年目に入り諸活動も一層充実してきた。従来からの吟行会、研修会をベースとしてサークルも既に七つに増えている。会員も力をつけてきており諸大会での入賞者も多く出るようになった。また広報面ではホームページの運営も二年目に入り内容も一層充実してきており、ネットを通しての入会や問合せ等も増えている。更にはこの先、神奈川清韻第二集の発刊や漢詩鑑賞会も企画されている。

本会報も今後とも会員からの投稿は歓迎するので、漢詩についての思い、あり方について、積極的・建設的なご意見を寄せて頂きたい。

昔「七年目の浮気」という映画があったが、七年目で浮気するのではなく、視野と裾野は広げつつ、目的はしっかり見据えた活動を目指したいと思う。　(三村／中島／川上／吉岡)